

浄土

1995・4



私にとっての法然上人◇梶村 昇
仏法双六・浄土双六 ◇大谷旭雄
韓国のはなまつり◇編集部

【連載】

念仏信仰の系譜——須藤隆仙
楽屋ゆかた——関 容子
共に生きる——御所野洋幸
教育の現場から——内堀照夫
誌上特設ざらりい
忘れられた寺院●横村克宏



咲いたら、幸せ。

楽しい、嬉しい。

ちょっと切ない、なつかしい。
いろんな話をしたり、聞いたり。

そんな何気ないことが、人と人との
固い絆の第一歩。

それぞれの人の、それぞれのお話に
花を咲かせるお手伝い。

安い市外電話の、0088です。

日本を楽しくする電話

0088

お問い合わせ・お申し込みは、日本テレコムお客様センターまでお気軽に。



0088-82 (無料)

または 0120-0088-82

●受付時間 9:00～23:00 (年中無休)

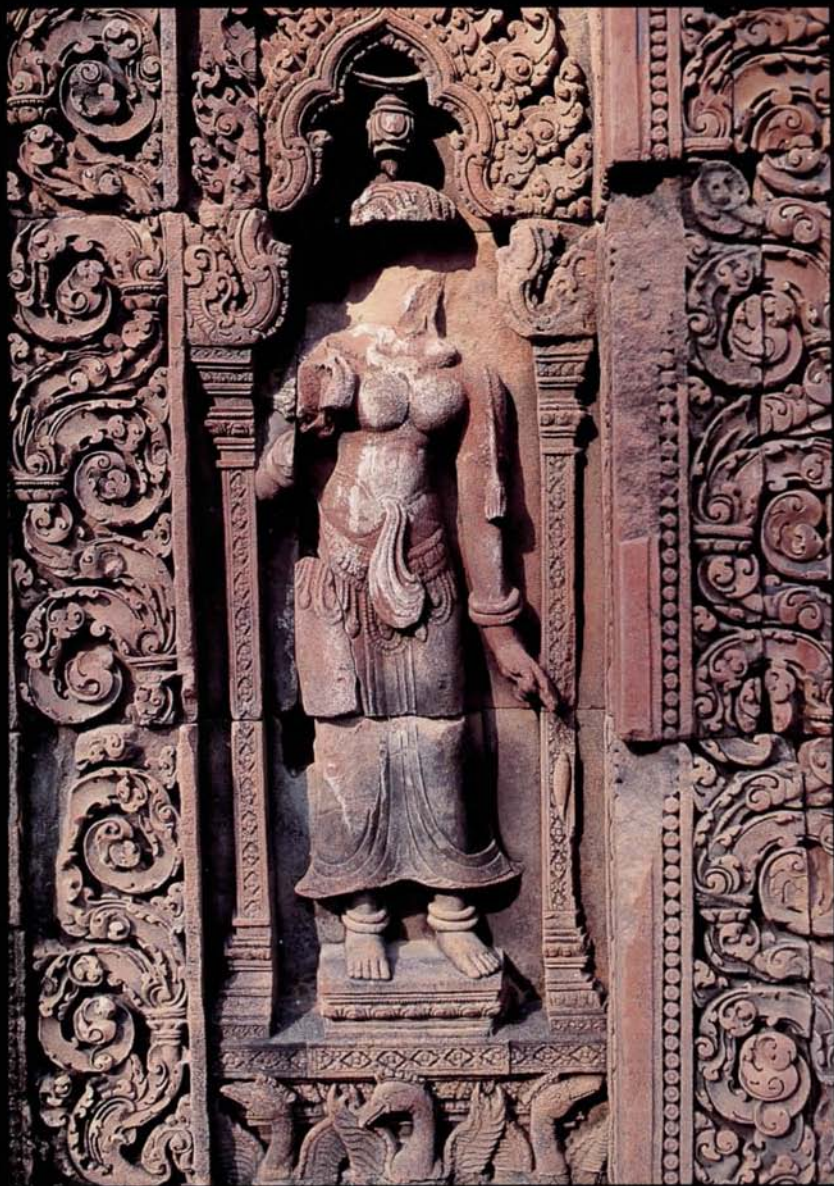
誌上特設ざらりい

忘れられた寺院.....①

photographer
横村克宏









忘れられた寺院

バンテイアイ・スレイはアンコール・ワットから東北へ約35キロ、シエムリアップ川上流にある美しい小寺院である。

バンテイアイ・スレイとは、クメール語で「女の砦」の意。

その名の通り、確かに女性的に優美で繊細な彫刻が、壁面、柱、扉など全面に施されている。

また、ここの本殿祠堂の砲弾形の堂塔の形式がやがてアンコール・ワットの尖塔へと発展していったといわれ、遺跡群のなかでもとりわけ文化的に貴重である。

この素晴らしい寺院が自然の猛威と盗掘によって凄まじい破壊を深行させながら、いま忘れられ、失われようとしているのだ。

本文関連記事に続く

浄土



1995/4月号 目次

カラ・グラビア忘れられた寺院	写真=横村克宏	3
私にとっての法然上人	梶村 昇	8
佛法双六・浄土双六	大谷旭雄	6
表紙は語る 共に生きる	御所野洋幸	22
忘れられた寺院 横村克宏の仕事	編集部	26
教育の現場から	内堀照夫	30
楽屋ゆかた松本幸右衛門(三)	関 容子	38
コラム		45
念仏信仰の系譜日本編①	須藤隆仙	46
コラム		53
韓国の花まつり	編集部	54
コラム		59
仏教者最前線・阪神大震災レポート	アーユス	60
Jフォーラム歌壇/投句/BOOK		64
編集後記		70

表紙題字=浄土門主 中村康隆猥下

表紙撮影=御所野洋幸

アートディレクション=近藤十四郎

巻頭寄稿

邂逅

私にとつての法然上人

梶村 昇

(一)

人の世の邂逅（めぐりあい）ほど不思議なものはありません。不思議とは人間の知恵では考えられないことをいうのですが、私にとって法然上人との邂逅は、まさに不思議としか言いようがありません。

私は大正十四年、京都で生まれ、父の仕事の関係で、生まれるとすぐ千葉県の方へ移り住みました。父は次男坊でしたので、私の家には先祖伝来の仏壇などはなく、私にとって仏教は全く無縁な存在でした。

昔、といっても戦前・戦中の旧制高校・専門学校時代のことですが、当時は面白いことに、入学すると日本中みんな同じような本を読んだものです。まず倉田百三の『出家とその弟子』『愛と認識との出発』などから始って、安部次郎の『三太郎の日記』、西田幾多郎の『善の研究』、それから『歎異抄』、カント、ヘーゲルへと進んでいったものでした。戦時中には、吉田松陰の『講孟余話』や『万葉集』もそれに加わりました。文化系も理科系も一応みんなこんな本に触れ、その後それぞれに分れていったものです。

私もその中のひとりでしたが、仏教と無縁に育った私は、こうした書物に強烈な印象を受けました。言ってみればそれは、精神世界の存在そのものに目覚めさせられたということだったと思います。昔の中学四、五年生の目には、政界や経済界、学界や新聞界など身近なものは見えておりましたが、精神世界の存在などには気づきませんでした。とくに私がそれに触れる環境になかったからでもありましようが、大袈裟に言えば、これは私にと

って一種の回心であったと思います。

その上、時あたかも昭和十七、八年頃で、戦局は熾烈さを加え、私たちの前途には、出征・戦死という図式が待っているだけでした。本当に残り少ない人生という実感がありました。この実感と精神世界への憧れとが重なって、私はひたすら仏教書にのめり込んでいきました。入隊する時にも、私物の中に『歎異抄』や『万葉集』を入れていきました。

戦争が終り、焼け野が原の東京の真ん中に立って、これからどうしようかと思いました。日本そのものがどこへ行くのか分らなかった時でしたから、個人の将来など誰も相談にのつてはくれませんでした。

その時、こんなことを思いました。もし私が本当の信仰を得ていたなら、こういう時にどうするだろうか、と。そう思った途端、「よし、本気に仏教の勉強をしよう」と思いました。そしてすぐに頭に浮かんだのは、お寺の小僧さんになるということでした。仏教といえど、そのようなことしか思い浮かばなかったのだと思います。それから真剣に小僧さんの口を探しましたが、結局は駄目でした。無理ありません。戦災でお寺自体が大変な時でしたから、とても小僧さんどころの話ではなかったからでした。

そこで考えられたもう一つの道は仏教の大学へ入ることでした。ともかく何にも分らないのですから手探りです。そして大学なら本で親しんできた親鸞聖人の勉強のできる所と思いましたが、東京にはその大学はありません。東京を離れる勇氣はなく、それならば親鸞聖人の先生の法然上人の所へ行こう。それは大正大学文学部仏教学科浄土学専攻であると分りました。

こうして私は法然上人にめぐりあつたのです。何とも危ないめぐりあいでした。確信をもって法然上人を求めたのではなく、成り行きでの邂逅でした。それなればこそ尚更、法然上人が目に見えない糸で導いて下さったのだと思わざるを得ないのです。それから五十年、私は法然上人の研究に終始するようになりました。それは言うまでもなく、上人の偉大さに感動したからです。しかし歴史は上人の真実を伝えていません。それを明らかにする務めがあると思ひました。もう一つは、上人から与えられた問題が難しく、私には容易に解けなかつたからです。「私にとっての法然上人」は、その双方を述べるべきでしょうが、とても紙幅はありませんので、後者に少し触れてみたいと思います。

(一)

法然上人の教えとは、「心をこめて南無阿弥陀仏と申せ、阿弥陀仏が私たちを極楽浄土に迎えて下さる」ということです。これほど簡明なことはありません。しかし私のように仏教と無縁に育つてきたものには「心の底から南無阿弥陀仏と申す」ということは実に難しいことでした。南無阿弥陀仏と申せば、極楽に往生出来ると説かれた仏教經典の論理は分ります。しかし知ることとは出来ても信ずることは容易ではありません。

自分が申せないからといって、他人まで邪推してかかるのは悪いことでしょうが、実際、本屋の棚に並んでいる法然上人や親鸞聖人の研究書を拝見しても、はつきり言つて、ほとんどの著者は、浄土教の論理に共鳴しているのであって、著者自身が念仏を心の底から称えているとは思えないのです。たとえばマルキストの三木清が親鸞に惹かれたといひます

が、彼は心底、念仏を称えたのでしょうか。私の尊敬する先輩は、真摯な親鸞研究者で、本もたくさん書いておられますが、念仏を心の底から申せないと常々嘆いておられました。浄土教は念仏を申すことでしょうか。それが出来なくては、どのような研究も結局は観念に過ぎないのではないのでしょうか。

このようなことが高じて、果たして法然上人の高弟である聖光上人や親鸞聖人は、法然上人の教えを聞いて本当に心の底から念仏を称えたのだろうかとまで疑うようになりました。墮地獄の罪に陥ったというべきでしょうか。しかもなお悪いことに、私はその裏付けを一生懸命に探したりしました。

たとえば聖光上人が『末代念仏授手印』の「裏書」に、

「念仏の」義を知らず、その文を知らなくとも、ただ称名の行によって、往生することが出来ると、弟子である私、聖光は法然上人に拝面のとき、学び習いました」

と書いておられますが、「義を知らず、文を知らなくとも」という言葉の裏に、聖光上人の念仏との烈しい葛藤を垣間見る思いがします。

親鸞聖人は有名な『歎異抄』の第二章に、

念仏は本当に浄土に生まれる種なのか、また地獄に堕ちる業なのか、そんなこと全く私の知らないことである。

と述べたとありますが、ここにも親鸞聖人の念仏に対する苦闘の軌跡を窺うことが出来ます。もちろん二祖ともに、その葛藤の果てに念仏に生きる人生を感得せられたことは言うまでもありませんが。

(三)

聖光上人や親鸞聖人でさえこのように苦闘されたのですから、心の底から念仏を申すということは、本当に難しいことだと思いました。なぜ南無阿彌陀仏と申せば極楽に往生出来るのでしょうか。第一、阿彌陀仏とは何ですか。極楽とは何ですか。往生とは何ですか。

阿彌陀仏とは、サンスクリット語で Amitayus・Amitabha・Buddha、漢訳で無量寿仏・無量光仏です。「量り知れない寿と光とをもつたみ仏」に南無(Namam) 〓 帰依するということが南無阿彌陀仏であると教えられました。

しかしこれが私には躓きの石となりました。私たちの人生の外に、阿彌陀仏というスーパーマン的存在がいて、そのみ仏の名を呼べば願いが叶えられる。少なくとも私にはそう受けとれたのです。そしてそれがひどく呪術的にみえ、これでは商売繁昌・病氣平癒を願って神仏に祈るのと同じではないか、念仏はそのようなお呪いでも呪文でもないはずだと思つたのです。經典で知ることと信じることとの径庭に、天地の隔絶を感じました。私はこれが法然上人から出された問題だと思いました。

時には「理屈を言わずに、ひたすら念仏を申すことだ」と反省し、ある山にお伴して念仏に明け暮れる日々を送つたこともありましたが、我が強いのでしょうか、これは精神的暴力ではないかと思つたりして、結局元の本阿彌に戻りました。

ある時、こういうことに気づかせられました。阿彌陀仏は、私たちのように仏道修行の出来ない凡夫、三学非器の悪人を救おうとして「我が名を呼べ」といわれたのでしょうか。

とすればその名の中には、そうした人々を救おうとする仏の働きが示されているのではないかと。

そこで改めて阿弥陀仏の名を考えてみました。阿弥陀とは、仏を讃仰する名だけではなく、救わなければならない凡夫の姿も示されているのではないかと。すなわち寿とは、仏の寿ではなく私たちの人生であり、光とは、仏の世界ではなく私たちの世間であり、無量とは「限りない」ではなく「思い量ることが出来ない」ということ、すなわち阿弥陀の字義は「人間の知恵で思い量ることのできない私たちの人生と世間」ということではないか。そのことに目覚められた方、それが仏で、結局、南無阿弥陀仏とは「人間の知恵で思い量ることのできないこの人生と世間、そのことに目覚められておられるみ仏に帰依いたします」ということではないかと。

こう気づかせられたとき、私の知と信との径庭が一挙に縮まる思いがしました。なぜかといえば、これは全く今まで私の歩んできた道そのものであったからです。法然上人との邂逅、戦争の体験等々、今までの私の生涯は「私の知恵などでは思い量ることのできない人生と世間」でした。そしてこの人生と世間とを生きていくには、そのことに目覚められた仏、阿弥陀仏に頼って生きていくしか道はないかと思つたのです。浅はかな人間の知恵が役にたたなかったことはすでに証明済みですから。阿弥陀仏が「我が名を呼べ」といわれたのは、このことだと思いました。人間の知恵を越えた大いなるもの、阿弥陀仏に信順なさい。任せなさいということですよ。

しかしこう申し上げても、私より頑固な人がいて、「何も阿弥陀仏でなければならぬ

わけではない」と言うでしょう。それでも結構ですが、一つだけ同調していただきたいのです。それは私たちの人生・世間には、人間の知恵を越えた何かが存在するということです。実際この世の中、あなたどんなに頑張っても、なるようにしかならないでしょう。それは分かっていただけだと思います。それは何でしょう。あなたはそれを「時の流れ」だ。「自然の成り行き」だとおっしゃるかも知れません。それで結構です。それが人智を超えた大いなるものではありませんか。私はそれを阿弥陀仏だと言っているのです。これは決して独断でも偏見でもありません。善導大師の『法事讃』の中に、

仏に従ひ逍遙して自然に帰す。自然は即ち是れ弥陀の国なり。

とあります。生きているときは仏に従って生き、いのち終われば自然に帰る。自然がとりもなおさず阿弥陀仏の国、極楽浄土であるといわれるのです。私は自然の成り行きに任せて生き、自然に帰ろうと思っております。人生の一大事は結局それに任せるしかないでしょう。法然上人が禪勝房に示されたお言葉に、

生けらば念仏の功つもり、死なれば浄土へまいりなん。とてもかくてもこの身には、思ひわづらふことぞなきと思ひぬれば死生ともにわづらひなし。

とあります。まさしくこのことだと思わせられます。

こうして私は人生の達人・法然上人に与えられた課題に取り組んで五十年経ちました。これが「私にとっての法然上人」の「こ」までです。

(浄土宗総合研究所客員教授・亜細亜大学教授)

◆ ◆ ◆ 佛法双六・浄土双六



大谷旭雄

私の場合、佛教書をひもどいて、そのまま順調に読みおえることはまずありえない。その理由は未熟だからといわれてしまえばそれまでだが、やはりそこには佛教語の難解さが横たわっていることも否定できない。

未知の難解な佛教語に出会っては停滞し、座石の佛教辞典をひいては頷いてまた先に進む。それでも納得ができずに頁を戻し、ときには巻頭にまで逆戻りすることすらある。そんな己れのあゆみは何か子供の頃、夢中になつて遊んだ双六のそれによく似かよっている。座石に置いてある中村元博士の『佛教語辞典』はその難解な佛教語と「日本における万人共通のことばで表現しよう」と思いたつて、実に三十二年を費やして完成された労作である。「佛教語はなかなか難しくわかりにくいという歎きを耳にする。専門家にもなかなかわからないのだからこそ研究が必要」とは含蓄のある博士の言葉である。

佛教語の難難さは今に始まったことではな

く、江戸時代として同様であつたらう。寛永

(二六二四)一六四三の末ごろ、浩繁で難解な佛教語を双六の遊戯法を用いて学ばせようと思ひつた人がいた。一枚の紙面に佛道修行の道程を示しながら、そこに多くの佛教語を配置して双六の型態をとのえ、サイコロをふってコマを進め、行きつ戻りつ、あるときは停留しながら「上り」と定められた妙覚(究極の佛の位)に向けて一コマ／＼近づいていく。そうしたなかで佛教語や教えの内容を説いたら、教えを受ける方もきつと興味をもつて理解できるにちがいないと考えたのであろう。

かくて考案された双六は『佛法双六』と名づけられたが、またそれは佛の証(証果)を求めてあゆむ菩薩たちの修行の道程を示していることから「証果増進之図」ともいう。後には「僧侶増進諸宗佛法明図」を題するものもあらわれた。さらにそこには多くの佛教語の名目が連ねられていることから「名目双

六」とも呼称されたらしい。

いま、この『佛法双六』の区画は「上り」「振出し」「無間」等をふくめて実に一三二区画に及ぶが、それだけ多くの佛教語が配置されていることにもなる。

この双六の考案者が天台宗の僧であつたことは従来の考証等によつて知られるが、何故か、作者はその名を語っていないのである。

この『佛法双六』は慶長以後、幕府の体制が双方に固められて宗教政策が具体化し、佛教語宗をそれ／＼に学林制度が確立していく中で、天台宗侶の養成に供しようとして考案されたものと思われる。従つて、この双六はほとんど一般化しなかつた反面、各宗の学林や僧侶の間に静かに流布したものらしい。天台宗に限らず、浄土宗寺院の経蔵にある蔵書の中には必ずと云つてよい程、これをみうけるのはこれが諸宗にわたつて広く流布したことを示すものであろう。

そうした中で、この双六は再版が重ねられ



たように、多くの考証的随筆をかけた柳亭種彦は「今も印行のものありて『佛法双六』という」と伝えているから、幕末の文化年中にもなお印行されていたことが知られ、さらに明治三年にも印行された事実もある。

また、この双六は貧・瞋・痴（むさぼりといかりと無知）等の三毒、仏道修行者が必ず修さねばならない最も基本的な修行である戒・定・慧の三学とを刻んだ特殊なサイコロを用いるが、それを手に握って、いよいよ双六の紙面をひらくところはまさに机上の修道場と化す。実際にこれをやってみると、下界をさまよって六道を往来して輪廻し、やつのこととして十信の入口に至ると、コマは遅々として先に進むことができない。そんなとき、机上の道場ではかつて比叡山での修道中、「われ戒・定・慧、三学の器に非ず」と絶叫したわが浄土宗祖、法然上人のお氣もちの片隣を思いださせてくれることがある。

このあたりに作者が双六の遊戯法を用いて、

さまよえる人間の輪廻の名目を教えようとしたみごとな発想がうかがえるのである。なお、それらの名目には例えば「頸部陀^{アブダ}」、「尼刺部陀^{ニラブダ}」などと全てにルビがふられており、当時の読み方をそのまま今に伝えている。

ところで、明治三十七年一月一日から書き始めた志賀直哉の日記は現在見ることできる最も若い頃の記録であるといわれるが、その一月八日の頃に、

夜、祖父、父、英子、直三、よし子等と佛教のすご六をなす。常なく面白く家庭の暖か味は多少益す。今日日頃誠に嬉しき傾向にこそ。

とある。直哉の研究者、池内輝雄氏は所論のなかで、この日記に注目し、ここにある「佛教のすご六」を『佛法双六』ととらえて、直哉がこの日、家族とともに興じた双六『佛教双六』であったことを論じている。（『志賀直哉の領域』）このとき、直哉は満二十一才で学習院在学中、義母妹の英子は七才、同じく

弟直三は五才、妹よし子は三才だったという。老幼をまじえた正月の双六遊びを通じて直哉は「常になく面白く」思い、そこに「家庭の暖か味」すら感じているのである。双六にはそんな親昵感をよびおこす不思議な秘力があ
るのかも知れない。

縁は奇なものである。私は四代目、中村梅玉丈の後援会の席上で、直哉の令息である志賀直吉さんと出会い、話のついでに「直哉さんが青年の頃、佛法双六に興じたというようなことを聞いたことがありますかね」と尋ねてみた。勿論、何も応答はなかったが、そのとき、私の脳裏によぎったのはことによると、日記の中で「佛教のすこ六」というのは「佛法双六」であつてもよいが、その言葉は多くの佛教の双六の中のどれでも該当することであり、たとえばそれは「浄土双六」でもよいのではないかと。しかも、七才、五才、三才の直哉の義妹弟達がああ絵もない、佛教語ばかりが紙面にあふれた「佛教双六」で、笑い

さざめきながら楽しむなどということはとう
てい考えにくいからである。

ともあれ、「佛法双六」は柳亭種彦が「還魂紙料」に「是（佛法双六）を絵双六にひきなほしが起りなり」といつているように、やがて、絵双六としての「浄土双六」を誕生させる母胎となつたのである。

いま、「浄土双六」と称される双六の種類は決して少なくないが、その当初の形態を伝えるものとして山本正勝氏や東京博物館、それにアン・ヘーリング女史が所蔵するものなど三・四点が知られているにすぎない。これらは紙面の大小、画相の相違はあるが、いずれも九十五区画からなる同系統の双六である。

この双六の特色は最上級の中心に阿弥陀の一佛、あるいは弥陀の三尊像を描き、「ふりだし」は「仏法双六」と同様「南閻浮州」であり、最下段中央には「無間」と並べて「永沈」（永久に奈落の底にうち沈む意）の一区画をおき、また、佛・菩薩はすべて彫刻され



た佛像で描かれていることであるが、さらに、もう一つの特徴は「南無分身諸仏」と刻んだ特殊なサイコロを用いることである。当時の人々がこの双六を称して「佛像双六」（嬉遊笑覧「四」といったのはいずれもその特色に由来する別称である）。

『浄土双六』は寛永の頃にはすでに発していたといたともいわれるが、万治・寛文（一六五〇―一六六〇）頃から宝永（一七〇四―一七一〇）の頃までに成立した俳諧や草紙などにはこの『浄土双六』を題材としたものがかなり指摘されるところをみると、この頃がその最盛期だったものと推せられる。いま、それらの句集のうちから二、三の句を窺ってみよう。

まず、慶安三年（一六五〇）に版行された『望一手句』には

願ふこそ只極楽の花の緑 永きひねもす打つ絵双六

とあり、また万治三年（一六六〇）北村季吟

の編した『新続犬筑波』には重信が、

前句 ひとをこひ目もあやなす双六

附句 絵をみても浄土のさまぞ願はしき

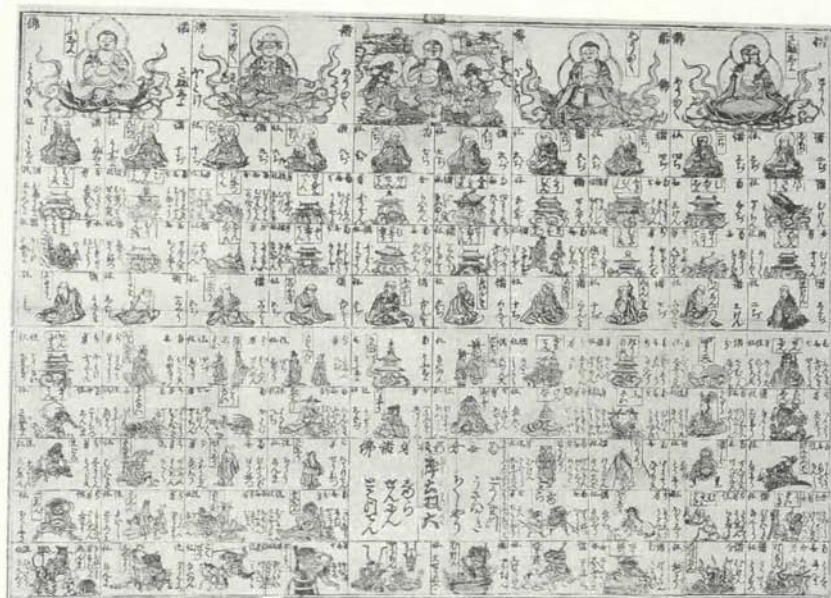
と詠んで句があり、さらに、寛文二年（一六六三）版行の『雀子集』には

こひねがふ浄土双六や諸佛名 正次

と詠んでいる。これからの一句々から「浄土双六」をうち興じながら、あるいはそこに描かれた浄土絵相をみながら吐露される当時の人々の切なる浄土往生の心が伝わってくるような気がする。

また、元禄十一年（一六九八）に刊行された『初宵草嚙大鑑』という草紙には「百時の夜食浄土双六」という一節がある。

……九月の比、日待をせしに、明難き夜になぐさみとて、小歌 浄瑠璃、物真似など、さまざまなる中に、人の心の善悪は、これで見ゆるものぢやと、浄土双六をうちけるに、やうちん（永沈）へおつるもの有り、餓鬼道へゆくも有り、一人は佛となりたる



とてよろこぶ所へ、「御膳を出します」といへば、おのゝ座敷をつくる。佛をうちたる者、「おれは佛の居所へなほる」とて、上座をしめければ、口かしこき者のいふよう、「それならば、まず喰ものは餓鬼道てまひまする」と申し、ほとけには何もくわせぬ。

と。じつと味うと、秋の夜長に『浄土双六』をうち終えたあとのにぎやかな笑顔がきこえてくる。

ところで「永沈」は『浄土双六』を特色づける重要な言葉であるが、辞典類には何故かその項目はない。ただ『広辞苑』だけには「地獄浄土双六でそこに入れば、以後の勝負に失格する所、地獄の異称」となる。地獄の異称ならどこかの経論に出典があろう。あるいはそれは『浄土双六』の作者が構想した双六用の佛教語なのだろうか。さて真相は。



表紙は語る

本誌表紙写真・文〇御所野洋幸

共に生きる

— ブナ原生林から —

森は水を貯え、土壌を作る。

地球温暖化の原因になっている二酸化炭素を吸収し、鳥獣を育て、プランクトンや虫の育成まで行ない、結果的には魚類も保護している。

その森の働きの要、それがブナの原生林なのだ。

樹齢一五〇年のブナ一本で、約八トンの水を貯え、ヘクタールあたり年間十トン近い葉を落とすという。

雨が地表を走ることを抑えて洪水を防ぐブナ。果実は鳥獣を養い、落葉は土を肥やし、山菜や他の野草をそだてるブナ。森の母、森の医者と呼ばれるブナ。そのブナと共に生き、写真を撮り続けるひとりの写真家がいる。
(編集部)

森の出会い

森の驚き

平成三年四月二十七日、今年は雪解けが早く昨日除雪もすみ、午後三時三十分山のキャンプ場に到着。

森吉町役場の計らいでキャンプ場の管理棟を借りることができテントは不要になった。

電気なし、風呂なし、水は外の井戸でもテントの生活を覚悟していた私にとっては快適な住空間である。荷物の整理もそこそこに、カップを着込み、夕食用の岩魚釣りに出る。

一振目すぐ来た、小さい十五センチ程の放流サイズである。四振目来た、二十五、六センチのまあまあのサイズだが瘦せている。サ

ビがまだ残って全体がなんとなく黒ずんでいる。ふと目の前を見るとこの岩魚の肌とそっくりの木がある。それは雨で木肌を濡らし水をたっぷり含んだブナの木だ。

私の遊び心が急にしばらく。

釣りはやめ管理棟に戻り明日からの撮影の準備をし、夕食も終り、七時三十分寝袋にもぐり込む。外は時々強く吹く風に雨が踊りバチバチと窓を打つ。

何度も目を覚ます。朝三時四十分寝袋から抜けてる。霧で星は見えないが天気はよさそうだ。熱い味噌汁に冷や飯を入れ生玉子を落とし胃袋に流し込み、リンゴ、チョコレート、チーズ乾パンをウエストバックに入れ、熊除けの鈴をカメラケースに付け出発。

残雪を通り抜けた冷い風が肌を刺す。寒さが身を引き締める。四時十五分東の空が少し

明るくなり始めた。三十分程で空がすっかり明るくなり、日の出前なのに鳥たちが動き始めた。『タタタタタ、タラララ、……』、昔の木のオモチャの機関銃とそっくりだ。どうしてあんなに早く木を突つくことができるのだろう、アカゲラだろうかアオゲラだろうか姿は見えない。一時間半程歩いた。

太陽が出た。水ナラとブナの新芽が先を競うように日の光を浴びている。絹糸のようなうぶ毛に被われた新芽が早春の光をうけ白く輝やいて林の中をにわかに明るくした。気持ちはずんてくる。汗ばんだ頬につめたい風が心地よい。芭蕉の奥の細道に『有難や雪をかをらす南風』とあるのを思い出す。

道路から三十メートルぐらいの斜面の下にノロ川の本流がある。川のまわりは雪解けが早く小さい緑が顔を見せている。そこに三脚



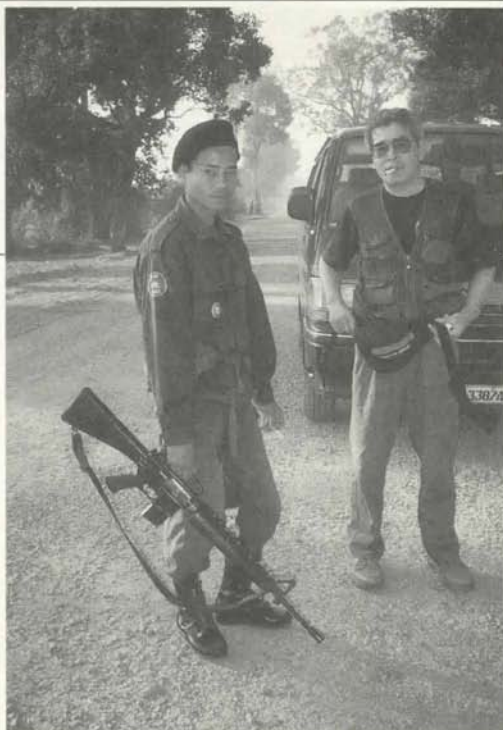
を立てカメラをセットした。ピントも合せカブリ布を首に巻き露出計を手にし、太陽が雲間より出るのを待つ。と、突然左側の斜面でガサ、ガサと音がする。振り向くと熊だ、大きい、すぐそばにいる、目と目が合った、いきをのんだ、動けない、熊も動かない、どうしよう、目を外らすことはできない、瞬きもできない、全身の毛穴が開いて、身体が固ってしまった。目の前は雪解け水で水量の多い川、後はすべりやすい斜面、逃げ場はない。とつさの行動だ。カブリ布を両手で広げバンザイの恰好で「ワー」と高い声で叫んでみた。熊は笹藪の中に逃げた。ホッとして坐り込む。熊とのニラメッコは十秒程であったが私には長い時間を感じられた。動悸が治まってから足跡を見ると私との距離は十メートルぐらいであった。早々に撮影を切り上げその場にチ

ヨコレートと乾パンを置いて帰る。翌日見るとチヨコも乾パンもなく熊の足跡だけが残雪に残っていた。

東京に帰ってから居酒屋で友人に熊との出合を話したら、なぜ熊の写真を撮らなかった、お前それでもプロのカメラマンかと笑われた。一言もなかった。あの恐ろしさは酒で顔を染めている友人には理解してもらえそうもないし、唇かしくもあった。その後図書館で野生の動物、草花、昆虫などの知識を少し仕入れ、ヒマラヤ雪男探検隊々員にもなった阿仁マタギの鈴木松治氏に会い山の話や月の輪熊の行動など聞いた結果、あの時季熊との出合で私のとつた行動は誤りではなかった。しかしチヨコレートと乾パンを置いたのには疑問が残すが、それは熊の領分に無断で立ち入った、あの時の幼稚な詫びの気持ちであった。

バンティアイ・スレイ
入口でガードの警官と

人類の誇るべき文化遺産が自然の
猛威、内戦、盗掘によって見るか
げもなく荒廃し放置されている。
忘れられ、喪われていく寺院。そ
こに立ち尽くす写真家がいる。



忘れられた寺院

——写真家横村克宏の仕事——

編集部



西南から見たバンティアイ・スレイ全景
周辺では政府軍が地雷の探索をしていた

本誌巻頭グラビア「誌上特設ぎやらりい忘れられた寺院①」の写真が撮影されたのは今年の1月、いま思えば阪神大震災の起きる数日前のことであったという。

撮影者、横村克宏氏はかつて長い間報道取材、広告等幅広い分野で活躍してきたカメラマンである。

あえて誤解を承知でいえば、いわゆるプロフェッショナル、いいかえれば何でもこなす腕のいい職人型のカメラマンであったともいえる。現代日本をある一面で象徴するような一種企業戦士の営為に明け暮れていたその彼が、激しい内戦によって荒廃したカンボジアを直視することによって、写真家として大きなテーマ性を獲得することになる。そのきっかけとなったのは、日本写真家協会の有志と語らい、常に新しい映像表現を追求しようと平成元年に結成した「ハチク会」である。

「ハチク会」はNGO「難民を助ける会」

「じやかいもの会」と連絡提携しつつ、それぞれジャンルの違うプロの集団として高度の映像表現を示す数度のチャリティ写真展を開催、収益金約三百万円をカンボジアに寄付したのである。

その資金で現地に学校が建てられたのは平成6年のことであった。

学校が建設されたのはベトナム側に近いカンボジア東部のプレイペン州ブレアッスタンチ市ルピア郡。

そこで受けた熱烈な支持、歓迎は日本でも多くの報道に取り上げられたので御存知の向もあるだろうが、彼らは決してこの結果に満足することはなかった。

こうした実践のなかでカンボジアの歴史に接した横村克宏氏は、九世紀から十五世紀に涉って建造されたアンコールを中心とした寺院の遺跡群が、いま自然の猛威や内戦や盗掘によって無残な状態のまま放置されているこ

とを知る。

現地に行き、錯綜する地雷原を越え、先行的に修復の仕事に入っている早稲田隊や上智隊からも情報を得ながら、写真家としてできることは何かを考えた氏は、寺院の荒廃の現状をそのまま撮影し全世界に知らせることをテーマとして選び取ったのであった。

忘れられ喪われていく寺院群の修復。

人類の誇るべき文化と文明の大きな遺産を、もう一度人類の手で蘇らせるために。

壮大な建築、繊細な彫刻の全てを復元するために。

本誌は、写真家、横村克宏氏の仕事を支援する。表紙掲載の御所野氏のブナ原生林を撮り続ける〈志〉の高い、素晴らしい写真に加え、ここにまた横村氏を迎え、営為の一端を掲載できることを誇りに思う。

彼はこう語る。

荒廃から立ち上がる力、その力とは現地の



庭に放置されたまま風化が進む破風浮き彫り

人々の力に他ならない。

復興はまさに自力で成さなければならない。

そのために何を協力すべきかを発想しなければならぬ。

その手助けをするために働くのだ、と。

フォト・ボランティア。

記録性についてはいうまでもない。けれどもそれにもまして遥かに芸術性に優れた写真による協力、貢献。

写真先進国である日本から生まれた初めての文化「ボランティア」といってもいい。

彼の仲間たち「ハチク会」はいま「フォトボランティア基金」を設立し、より一層積極的な展開を試みようとしている。

写真家、横村克宏。

彼の仕事は始まったばかりである。

「ハチク会」に関するお問い合わせは、

☎ 0471-4613303

横村克宏まで

教育の現場から

子どもの遊ぶ世界を尊重し
子どもを本来の「遊び人」に戻そう
―遊びへの大人の介入は心して―

遊

ゆつび小さな学園 代表
大妻女子大学大学院非常勤講師

内堀照夫

一、昔も今も子どもは遊び人

遊びをせんとや生まれけむ。

戯れせんとや生まれけむ。

遊ぶ子どもの声きけば

わが身さえこそ動（ゆる）がるれ

「梁塵秘抄」の一節であるが、なんと「遊び」を純粹に詠い上げていることか。八百年を越える昔も、子ども達が純粹な「遊び人」であつたことを伝えている。現代の子ども達のファミコン・テレビ・まんがの「遊び（っ）」は「遊ぶ子どもの声」とはならない、あまりの様変わり往時の人たちが見聞したらずる驚かれることであろう。

しかし、現代の子ども達もその本性では共通する「子ども」なのである。「子どもと遊んで上げる」などという思い上がった気持ちを捨てて、「子どもと遊んでしまふ」心境で子どもとともに在って、子どもの「遊び」を

観つめるとき、一つ一つの動きがいのちの躍動となつて目に映つてくることが多い。

まだ上級生の登園してこない運動広場で、一年生の達夫は一人、ブロックの飛行機を組立て、それを右手にかざし「うーん、うーん」と小さなうなり声を出し、じつと、「我が愛機」を見つめながら、体操用のマットから離陸して跳箱へ、そこから平均台に飛んで給油し、次は食卓の上に着陸して乗降客に挨拶をして、次の空港＝卓球台へと走っていく。おもわず、段ボール箱を切り開いて「滑走路ができたよ」と声を掛けてしまふ。

この達夫の動きを見ていると、達夫が自分をとりまいてるさまざまな物との関係の中で、それらに働きかけ、それらを何かに「見立て」次から次へと発想し総合して創造し、想像して「遊ぶ」、いつも何かを夢み何かを求めている存在であり、純粹に楽しんでいるのがひしひしと伝わってくる。

ここに子どもの本来の姿をみる思いがする。

遊

これが子ども達の真の姿にまがいがないと信ずることが出来るなら、親や教師は子ども達に接近するときに「目標」をもってする必要はあるまい。子ども達の内に在る成長の「芽」をはぐくみ、豊かに育てていけば、そこに子ども達自信の「目標」が生まれ意欲的な活動が開始されるからである。

二、新聞玉合戦の始まり

ここでは、宿泊活動に参加した子ども達が何回か繰り返すことで、だんだんと「組織化されてきた遊び」——新聞玉合戦——を取り上げて、子どもの遊ぶ姿をスケッチしてみたい。

東京の雪は、雪合戦の雪玉には向いていない。降っているときからべたついていて、雪合戦をするなら雪の降りしきる最中にしなければならぬ。雪が止んでからでは溶け出して水を含み握ると石のように硬くなって危険である。

そのことに気付いてきた子ども達が「新聞玉合戦」を発明したのである。

玉は一枚の新聞紙を大きく広げ、それを両端からグチャグチャに纏めていって、おにぎりを作る要領で玉にしていって、両手で握り固めるぶんにはどんなに強く握っても構わない。それをセロテープで十字に巻いて出来上がる。

初めての合戦では、新聞紙をていねいに小さく折り畳んでいき、一辺が五・六センチの直方体風の玉をつくった子がいた。これは硬くすることと投げたときにスピードがつくことを計算しての工夫であつたが、当たると痛いという意見が出された。それに対して工夫した子は「少しぐらい痛くなければ面白くない」と反論したが、多数決で禁止となつた。

次は剣である。雪合戦には剣はないが、ゆがびの新聞玉合戦には剣がある。これが面白さを倍増させる。剣が使われるようになっていった経過はさだかではないが、新聞紙を丸めてのチャンバラごっこイメージを重ね併

せていったものだろう。

最初の頃は、数枚の新聞紙を棒状に丸めて、それにセロテープや糊付きビニルテープをぐるぐると巻いて留め、「エイ、ヤー」とやったのだった。これで頭を殴られると瘤ができてしまう。ヘルメットでも被らないと危ない、泣く子も出る。

そこで、新聞紙の枚数制限をすることになったが、それでもテープを隙間なく巻き上げると、鞭のような弾力のある強度が出て、これも危ないとのアピールがあった。

結局のところ、二枚の新聞紙を重ねて大きく広げ、縦の側から直径三センチ程度の筒に巻き上げ、これを四力所セロテープで止めて出来上り。リーダーが同じ条件で人数分作り配布することになった。叩き合うとすぐにグニャグニャになるが補強も修理も認めない、の申し合わせてある。

自分を防衛するための道具（盾や兜など）は、段ボール箱や厚紙を使って自由に作って

よい。特に目と耳を守るための工夫を凝らすように助言していく。

三、合戦に備えつつ

紅白二つのチームに分かれる。チームの構成にはいろいろな方法が考えられるが、構成員全員が納得するチームづくりを工夫する。

「ゆうび」では、最初に二人のキャプテンを選出して、その二人の「とりとり」にすることが多い。「とりとり」は、ジャンケンで勝った者から交互に自由にチームのメンバーにする人を指名していく方法である。この場合、ハンデイー（障害）のある子の処遇の如何によつてはリーダーの助言がなされるが、男女差や年齢差などへの配慮はまったくなく、全て子ども達に任される。

陣地づくりの用具。その辺りにある体育用具や遊具や机椅子など利用できそうな物を指差し周知させてから、これも、キャプテンの

遊



「とりとり」で振り分けていく。

いよいよ両陣営に別れて、陣地の構築と武器作りが始まる。これにかかる時間は、実際に戦われている時間よりははるかに長い。だが、この時間がいいのである。

子ども達は、新聞玉や盾や兜を作りながらこれから始まる戦いに向かって心を高揚させていく。

この時からのチームの活動は、「子どもの遊びの要素の一つ、協力（団結）し合い、競い合う」の典型を見せてくれる。

この他にも子ども達の創る「遊び」には、次のような要素が挙げられる、

○楽しい。

○遊ぶことが自体が目的である。

○体を動かし、声を出す。

○繰り返し行われる。

○創造性をもち発展的である。

○流動的であり破壊的な面をもつ。

○場所と時間に制約されない。



○自然への働きかけが旺盛である。

これらが次ぎ次ぎと展開する。

指先の器用な康子は、「わたし丸めた新聞玉にセロテープを巻くワ」と自分の係を選ぶ。腕力に自信のある男の子達数名は、陣地の構築に余念がない。チヨコチヨコと動き回る低学年の二、三人の子は、もっぱら敵情偵察にまわり、スパイよろしく敵の陣地の様子や玉の出来ぐわいを報告し、我が方の玉づくりに檄をとばし、陣地の堅牢化を求める。六年生の靖子は、玉づくりの効率を高めるために、流れ作業が出来ようメンバーの作業場所の配置替えを指示する。

およそ三十分から四十分を経て、準備が出来る。

四、合戦の最中で

合戦の開始。少しぐらいの怪我は全く気にしていないが、目と耳の怪我は避けたい。注

遊

意はするがなかなか守りにくい。相手の体が静止しているのならともかく、お互いに動き回っているのである。エキサイトしてくれば当たってしまうこともあるし、思わず当ててしまうこともある。

戦いの最中に

「〇〇は、頭を叩いた!」「□□は、わざと耳にぶつけた!」などと言いつけに来る子もあるが、

「叩かれないように、ぶつけられないように。それ行つてやつつけろ」と戦意を煽る。

敵の陣地に潜入して新聞玉を奪つて来る子がいれば、敵陣の防壁を壊して回る子もいる。剣を捨ててもつばら敵の投げる玉を受け取つては投げ返す子も現れる。

気の優しい直子は、そつと敵の後ろに回つたが相手が気が付かないでいると、思わず「ぶつわよ」と声を掛けてから剣をふり降ろすのだった。

戦いは、五分間位を一区切りとして、作戦、

陣地の再建、武器の補給や修理などのタイムを置いて再開、三〜四回行う。それでも子ども達は息をはずませ汗びっしょりになる。

二回戦が始まろうとしたとき、直子の父親が「これは面白い。わたしも入れて貰うゾ」と一回戦で負けたチームに飛び込んでいった。自立に不安を感じさせる兄弟も参加していた。四年生の絹子が「お兄ちゃん、薬と水だけで生きているんだよ」と話す六年生で登校拒否をしている兄、克夫も合戦のメンバーに加わっていた。克夫は、戦いが始まって、自分達の陣地の中に隠れて本を読んでいる。それをめざとく見つけた敵軍は、克夫に集中攻撃を加えていった。たまたま、本読みを止めて飛び出した克夫は、思わず新聞玉を持つて反撃に出たのである。

五、合戦を終つて

合戦がすべて終つてから漏らした克夫の感

想は「馬鹿みたいな遊びだ」と思っていたんだけど、やってみると案外面白いんだね」であった。それからである克夫が、体を動かす活動メニューにも参加するようになっていったのは。

新聞玉合戦は、何回か繰り返されているあいだに、子ども達に好まれる条件を備えた「組織だった遊び」に整えられてきている。

加えて、子ども達のユニークな発想と豊かな創造性と、疲れを知らない活動力が私たち大人までを「遊び」に誘い込んでしまった。

しかし、この合戦のように親（大人）が誘い込まれてしまうような場面は「希有な出来事」といわねばならない。

多くの場合、親や教師は無意識の内に、わが子や教え子を「このように育てたい」といった目標と方向性を持っている。従って、子どもの「遊び」を見ると、子どもは「遊び」を勧めるときも、一緒に「遊ぶ」ときも、目標と到達基準を設けて、何らかの付加価値を生み

出そうと働きかけてしまう。これはもはや子ども達の「遊び」ではない。

親や教師が、子ども達の「遊び」に接近する態度には次の二つが考えられる。一つは、前述の直子の父親のように遊ぶ子どもの力に促され自ら指導者意識を払拭して、子ども達に「私もいれて！」と声をかけていくことである。この時子ども達は大いに歓迎する。今一つは、遊ぶ子ども達の世界に介入して、子ども達の遊びを崩壊させてしまうことである。

「子どもの遊び」は、本来大人から隔絶された場所、大人の手を全く借りることがなく、初めから終わりまで子ども達の手でなされるものであること。楽しく、自発的であり、自由で、それ自身が目的であって、他の目的や手段となっていないこと。を自覚している親や教師でありたいと思う。

楽屋ゆかた

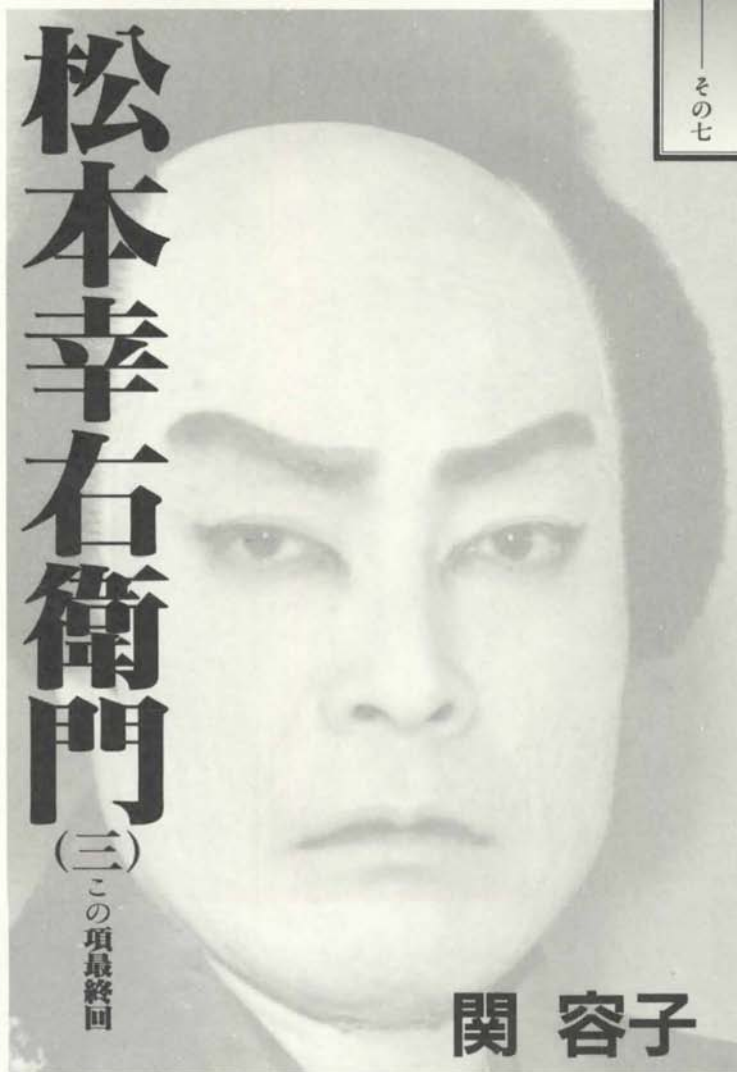
その七

連載

松本幸右衛門

(三)

この項最終回



関 容子

幸右衛門は豊島歌舞伎(豊島区主催)で『文七元結』の主役左官長兵衛をつとめることが決ったときから、いつもテープレコーダーを持ち歩いて熱心に聞き入っていた。そのお手本の長兵衛は勘三郎。

私は一日だけの公演(昨年十二月十五日)を楽しみにして、会場の豊島区公会堂へ出掛けた。客席には高麗屋の若旦那染五郎や、一門の錦吾の姿もある。全員熱のこもった舞台で、ピンと張りつめた緊張感が気持ちよく、いい出来だった。

「あたしと幸太郎と山崎屋の権一さん以外は全部国立の研修生なんです、みんななかなかよくってましたでしょう。仕上げは又五郎の旦那に見ていただいたんです」。

幸右衛門が又五郎から注意を受けたところを訊いてみた。

「幕あきて、娘のお久の姿が見えなくなつて、そこへ帰ってきた長兵衛とおかみさんが言い争うところ。いろいろあつて、『じゃあ本当に、お久はいないんだな?』『いないんだよ、お前さん』

『それを早く言やいいのに』つてどこ。テープではここを低い声でサラリと中村屋さんがおっしゃるんですが、お客がちゃんと笑つてる。で、あたしもそうやってみたら、直されました。『もつと派手に言わなきゃ』つて。まったくその通りで、われわれがそんなことをしたら、お客様に喜んでいただけません。もつともだと思いました。しかし、たまにこうやって芯の役をやらせてもらえるのは有難いですねえ。それで今度脇で出た場合、きつとどこか違ってくるはずですからね」

昨年の豊島歌舞伎は十月が『三人吉三』、十一月が『源氏店』で、十二月が『文七元結』。いずれも一回だけの公演なので、これでは夢中のうちに終わつてしまい、「せめて三日間やらせてもらえれば」というのがみんなの願いだ。

「高麗屋の勉強会では『忠臣蔵』(七段目)の平右衛門をやらせていただいたことがあります、舞台稽古を白鷺旦那の奥様(藤間正子さん)が御覧になつて注意されたことがあります。さすがに初代吉右衛門さんのお嬢様だけあつて、芝居を



「忠臣蔵」七段目の平右衛門を演ずる幸右衛門

よく御存じだと思いました。一力茶屋で由良之助が寝ちやいますね。するとあたしが蒲団と枕借りるのに仲居を呼びますね。で、のれんを分けてそこへ手を入れて向うを見込んでポンポンと手を叩いたんです。すると奥様が、それじゃあいけない、由良之助を起しちやならないというんで、由良之助のほうを見ながら手だけ入れて叩かなくちやあいけないよ、って」

正子さんが男に生れて二代目吉右衛門を襲いていたらどんな名優になつたろう……といろんな人が言っていたのをよく聞いた。

「これで寝められた思いもあるんですよ。しかも初代吉右衛門旦那の奥様(波野千代さん)にです。あたしが中車の旦那の弟子になつて間もなくです。それから昭和三十年ごろに、白鷗旦那の『番隨長兵衛』で中車の旦那が水野(十郎左衛門)のときでした。あたしは山村座の火縄売り(煙草用に売る)の役で、吉十郎さんに教わつた通りに、つまり『芝居小屋の出方(でかた)(雑用係)なんだからちよいと粹だが、相手が客の旗本の酔っ払いの仲間だ(ちやうばん)』

から腰を低くしなくちやいけない、考えてみりや難かしいもんだよ』と言われたことを心がけてつとめました。そうしたら初代さんの奥様が、『とても結構だったよ、しっかりおやりなさいよ』って。嬉しかったです」

私はこの千代夫人にはお会いしていないが、正子さんには何度もお目にかかつている。あるとき高麗座の古い弟子、女方の幸雀(こうじやく)の話が出て、

「あの人、今でこそ女方が身についてますけどね、来たてのころは坊主頭で金ボタンの中学生。主人(白鷗)の楽屋の次部屋に控えていて、『おい、誰がいないか。誰か』って呼ばれたら困つて、『おれ』って顔出したんだそうですよ(笑)。しばらくは『おれ』の話題で笑つてばかりいました」
と楽しげに語つた弾んだ声を思い出す。

その幸雀も昨年八月、心臓病で急死した。『巷談宵宮雨』の早桶屋の女房おとらが評判を呼んでいた最中のことだった。

「幸雀さんが亡くなつたと聞いてびっくりしました。八月は国立で坊ちゃん(染五郎)が弁天(小



入谷のそば屋の亭主、二八を演ずる。そばは本物ではなく白滝

僧)をつとめてましたから、浜松屋の出の衣裳(着付)を女方の幸雀さんが見てあげて、それから自分が出る歌舞伎座へ回るのが毎日の手苦だったんです。それが二十日には時間になっても国立へ来ない。それどころか歌舞伎座へも顔を出さない。それで電話も通じない。幸雀さんは独り身でしたからね。近くにいるお兄さんにやつと連絡がついて見に行ってもらったら、バジヤマ姿で亡くなっていたそうです。心臓のところに丸い貼り薬がしてあった、つて言いますから、よほど苦しかったんでしょうかねえ」

何日かしてそのお兄さんが幸雀の形見を配った。幸右衛門はゆかたと肌襦袢と女方用の羽二重をもらった。錦吾や吉之丞や幸太郎にもそれぞれ形見が届けられたときは、みんなその品々を前に肩を落して黙りこんだという。

「女方用の羽二重というのは細長い布(立役のは短かい)で頭を二回(ふた)りまわすんです。つまり目つりですね。去年二月、勘九郎さんの『大津絵道成寺』で、歌江さんと幸雀さんに混つて、あたしも

女方の唐人の役をつとめたんですが、そのとき女方さんは顔を白く塗って、衣裳も大変で面倒くさいものだなあと思いました。近ごろ幸雀さんの舞台がとてもよくなったと言われてたときに……本当に残念だと思います」

幸右衛門は、幸雀の死から三か月後、『直侍』の蕎麦屋の亭主役をつとめた。七輪を、バタバタ団扇であおいでいたら、この前のときは女房役だったの幸雀のことを思い出して寂しかったそうだ。

私は、その蕎麦屋の主人を慰めようと思い立ち、芝居のはねたあと新橋で最近見つけたおいしい蕎麦屋に案内する。

「なるほど、これはうまいですね。もつとも毎日あたしが舞台でこさえてる蕎麦は、白滝ですから(笑)。鍋のぬるめのお湯にドライアイスを入れてくと、ふたを取ったときに湯気が立つんです。さるで白滝をこうすくい上げてサツサツと水気を切って井に移したらそれ持って後ろを向くと本物の蕎麦がスツと出てきますから、それと取替えて婆さんに渡すと婆さんが直侍のところへ持って行く

わけです。蕎麦は歌舞伎座なら客席三階の歌舞伎蕎麦から、決まった時間にきちんと出前が届きます。これ届かなかったら大変だ。色男の直侍が間抜けにぬるい白滝食べるハメになる(笑)」

幸右衛門は辨酒が気に入って、だんだん元氣になつてきた。そこで、昔、白塗りで主役を張つていた小芝居時代と、今と、どちらがいいかと訊いてみる。

「やっぱり大歌舞伎はいいですねえ。小芝居でいい役をやつてれば御蟲^{ひい}もついて、あ、あの方がみえてる、つてんでそっち向いて一生懸命やつたり(笑)。そういう張り合いもあるにはありましたが、やつぱりこっちへ来たてのころは、桧舞台の桧の匂いは何とも言えないし、大道具小道具は立派だし、衣裳はいいし、それに白鸚旦那や中村屋(勘三郎)さんや、いろんな立派な方々と一緒に舞台上立つこともできる。いただく役は、これはいやだと言つてもやめさしてもらえなわけじゃなく、あれがやりたいと言つてもやらしてもらえなわけじゃありませんが、そうやつてるうちには

たまにいい役もまわってくる。天下の歌舞伎座の花道を引つこんで、それで手(拍手)なんかもらった日にゃあ、もう本当に嬉しいですからね。役者はこれが麻薬なんですよ。結構、出銭も多くてね。幹部さんになると初日と中日^{なちび}。われわれは『名題一同』として中日だけ、狂言方、頭取、口番、風呂係に祝儀を出す。衣裳、床山、それから揚幕の出があるときは揚幕さんには個人で出す。うっかりするともらう側の裏方さんよりわれわれのほうが収入は下かもしれません。でもやつぱり役者がいい。われわれは会社(松竹)の商品なんですからね。役者は三日やつたらやめられない、つて、まったくですねえ」

幸右衛門の前に蕎麦が運ばれて箸を取る。すっかり直侍の呼吸^{いき}だった。



(エッセイスト)

「諸行無常」という言葉はよく耳にします。今さら言うまでもなく、あらゆる現象、ものごとは常に移り変わって一時もどまることがないというのが無常の意味するところですが、このことは私たちの心についてもそのまま当てはまると、最近あらためて感じています。

振り返ってみると、この私の心というもの、何と頼りないことが。しっかりとした決意をしたつもりでもささいなことでぐらつき、きれいなものを見て感動したかと思えば、次の瞬間には何かずるいことを考えついたりする。ふらふらと常に揺らいでいるものであり、そこから様々な悩みも出てくるんですね。そんな私たちの心のありさま

若和尚の

一 其 し な は い い ト ツ ヨ チ

を詠んだ、法然上人の歌が思い起こされます。

池の水人の心に

似たりけり

濁り澄むこと

定めなければ

美しく澄んでいる池の水も、大雨でも降ろうものならちよつとの間に濁ってしまう。私たち人間の心もちょうど同じように純粹に仏思いの心でいるかと思えば、次には怒りや欲望の心が沸き起こってくる……。

出来ることなら揺らぎやすいこの心をしっかりとしたいものですが、それは大変に難しいことですよ。まるであつちの枝へ飛び、こつちの岩に走るお猿さんのような自分の心を、凡夫にはどうすることも出来ないか

もしれません。しかしそうだからこそ、やはり祈りということが必要なんだと思うのです。一瞬かもしれない、でも、阿弥陀さまに相對して祈る時の素直な

気持ち、そのわずかな時間を大切に、心が揺れ動いたらまた祈る。その繰り返し送る日々の中に、浅ましい私たちでもいつも仏様が一緒にいて下さるんだという喜びを、力を与えて頂けるようになる。揺れ動く私たち凡夫の心を嘆くと同時に、そんな意味も込めて法然上人はこの歌を詠まれたのではないでしようか。

ほどなくして本山では御忌を迎えます。元祖上人のみ教えを有難く戴き、心から感謝申し上げます。

(〇)

念仏信仰の系譜

須藤隆仙

日本編

一

● 仏教の伝来

日本に仏教が伝わってきたということは、単なる宗教上だけの問題ではなしに、国家形成のうえで大変な影響力があったことは、すでに国史上明瞭な事実であります。

それまでの日本には、日本固有の民族宗教としての神道があったのですが、これはまあ全く素朴な、それこそ裸一貫のような土着信

仰てありまして、ふんどしをした裸男のようなものでありました。財産らしいものもない貧乏暮しだったのでありますが、ここに西の方から仏教というお嫁さんが来たのであります。そのお嫁さんは、インドで生まれて中国で育ち、朝鮮を経て来た、美人の財産持ちのお嫁さんでありまして、体も丈夫であり、「文化」という、それはそれは立派な子供たちを、たくさん生んでくれたのであります。

日本はこのお嫁さんが来たお陰で文化国家に成り得たのであります。しかし儒教者などのなかには、この事実を否定しようとする人もおり、中江藤樹なども「仏教始まりて後、天下に於て何の益あるや。害はあげて数え難し」といつているのであります。後年、哲学者井上哲次郎は「仏教は我が邦の思想を豊富にし、また深遠にせり」としてこれに反論し、「神道の教義の如きも、仏教より得来たるもの少なしとせず」と喝破しておられるのであります（拙著『仏教故事名言辞典』）

さて、その仏教が日本に渡って来たのはいつかといいますと、公式に伝わったのは、欽明天皇十三年（五五二）に、百済の聖明王が使を遣わして仏像・経論などを、わが朝廷に献じたということが『日本書紀』に記されているのですが、別に『元興寺伽藍縁起』などには、十三年ではなしに七年（五三八）の事実だったとあり、紀年の誤記も指摘されて、今の史学界では七年説が有力です。ただしこ



れは公式に伝わった話（公伝）でありまして、私的にはもう少し早くに、筑紫（九州）地方などには入っていたらうと学説されております。

公伝の時にもたらされた仏像は何仏だったかといいますと、『日本書紀』には釈迦金銅像とありますが、長野の善光寺の縁起では阿弥陀如来としており、親鸞聖人はこのことを和讃に詠んでおります。他にも観音菩薩だったとか勢至菩薩だったとかの諸説があつて断定は困難のようであります。

ただ、ここでは、阿弥陀浄土信仰が史実の上に見えてくるのは何時頃かということが問題なのであります、以下そのことについて述べさせていただきます。

●聖徳太子と浄土信仰

仏教が日本にすっかり定着したのには、聖徳太子（五七四—六二二）の功績を忘れることができないでしょう。その聖徳太子に阿弥

陀浄土の信仰があつたか否かということについては、学者先生の深い研究がいくつもござりますが、かの教科書裁判で知られる家永三郎博士などは、あつたとするご見解をとっておられるのであります（博士著『上代仏教思想史研究』）。それは次のような理由によつてです。

聖徳太子著『維摩経義疏・仏国品』に『無量寿経』の一節が引用され、同じく方便品に『観無量寿経』の阿闍世太子の説話がある。

文献から推して、太子時代には阿弥陀仏像があつたと考えられる。当時の中国や朝鮮の仏教事情からみて、この頃阿弥陀信仰が日本へも流入したとみて不思議はなく、聖徳太子も時代の大勢の中で阿弥陀仏の西方浄土を信仰されたと考えられる。

このような考え方に對して、当時の浄土信仰の、その「浄土」というのは、必ずしも阿弥陀仏の浄土だと断定はできない、との反論もあります。



しかし私は、そういった反論よりも、聖徳太子がすぐに、自らの著書の中に、『無量寿経』や『観無量寿経』などの阿弥陀浄土経典を引用しておられる、そのことに注目したいのであります。

それにまた、太子がお作りになされた十七条憲法の第十条に、はつきりと、「我必ず聖に非ず、彼必ず愚に非ず。共に是れ凡夫のみ」と示されて、人間凡夫論を唱えられたこととあります。私はこれまで、阿弥陀浄土教の眼目は凡夫性の自覚にあるのだということを、述べてきているわけであります。太子はそのことを、きちんと押えておられるのでありますから、これはもう、浄土教のお方だと押し上げて差し支えないと思うのであります。

それだけではありません。太子は「世間虚仮、唯仏是真（世間は虚仮なり、唯仏のみ是れ真）」と告白されていたことが、次に述べてる天寿国曼荼羅によつて知られ、また太子

一族が太子の追善のために造像したと考えられる法隆寺釈迦三尊像の光背銘に、「往いて浄土に登り、早く妙果に昇らん」（原漢文）との文があるところからも、浄土教的な傾向があつたと推測されているのです。ただここでも、その「浄土」は、阿弥陀浄土とは限らないとの説もあつて様々です。「世間虚仮、唯仏是真」は仏教全般に通じる語との見解もありますが、浄土教的語とする意見もあります。この語が記されている天寿国曼荼羅がまた貴重なのであります。

●念仏信仰の播種

天寿国曼荼羅と称されるものは、聖徳太子の妃橘大郎女が、太子の死後、その往生した国を帰化系人に描かせ、刺繍させて二帳の帳としたものといわれ、今はその断片より残ってついでないのですが（奈良中宮寺、そこに記された銘文が『上宮聖徳法皇帝説』（太子の事跡などを記した書）に載つて



おり、その文中に、「我大王告ぐる所、世間虚仮唯仏是真」とあり（原漢文、また「謂に我大王、応に天寿国の中に生れましつらん」とあるのであります（同）。

そこでこの「天寿国」なるものについて、昔から今日まで、様々な考証説があるのであります。まず弥陀の極楽浄土説、これはすでに鎌倉時代に天台宗の定円という坊さんが唱えております（『太子曼荼羅講式』）。他に弥勒浄土説（松本文三郎・辻善之助）、維摩が往生した妙喜浄土説（大矢透）、釈尊の靈山浄土説（大屋徳城）、漠然とした十方浄土説（橋本凝胤）、果ては天竺（印度）浄土説まであるのであります。

しかし今日では、どちらかといえば弥陀浄土説が有力なのであります。それは中国仏教の権威者常盤大定博士が、三井家所蔵の古い中国の『華嚴経』を調べられたところ、その奥書に、「西方天寿国」とあるのを発見されたからであります。西方となれば正しく阿

弥陀仏の浄土であります。この事實は博士著『支那仏教の研究・一』（昭和一二年、春秋社）に載っております。

その後家永三郎氏は、天寿国の天は、無の異体字である无とも考えられ、无量寿国の量の字が脱落したものと解してもよいとの説を発表しましたが、そこまで言わなくとも、『西方天寿国』で十分なわけであります。つまり中国には、用例は少ないにしても、弥陀の極楽世界を天寿国と呼ぶ知識があったと思われ、天寿国の正体は、諸説の中で弥陀西方極楽浄土だったといつて大過ないと思うのであります。

他にも銘文そのものが後代に作られて縫いつけたものではないかなどの説もありますが、一つの憶説でしょう。（この外多くの先生から天寿国についてのご教示がありますが、別の機会に譲らせていただきます）

このようにして、聖徳太子の時代になりますと、弥陀浄土信仰がわりにはつきりと見え



てくるわけがあります。

それは、これまで述べてきましたように、仏教の根本にどうしても「凡夫」という問題がある、そこに必然的にそれを救う西方弥陀の信仰が出てくるからであつて、仏教のある限り、弥陀浄土の信仰はあるわけでありました。聖徳太子も、『維摩経義疏』に『無量寿経』中の文を引用しておられるその文は、「唯^{ただ}五逆^{ごぎやく}と正法を誹謗^{ひぼう}することを除く」（原漢文との一文であります。これは周知のように、弥陀四十八願中の第十八願の文の末尾にある文句でありまして、十八願というのは、人々が極楽を喜び信じてそこへ生まれようと願い、念仏を称えたならば、必ずその極楽へ救つてやるという阿弥陀仏（法蔵菩薩）の誓願であります。が、ただし、父母や高僧を殺したり教団の和合を破壊したりするような五大逆罪を犯した人や、正法を誹謗したりするような人は、その限りでない」という条件がついてゐるわけで、その条件がこの文句です。聖徳

太子がこの文句を引用されたということは、他でもない第十八願の文に注意をはらっておられたという証拠であります。つまり聖徳太子は、凡夫を問題とされ、その凡夫が救われる教えに注意をはらっておられたのでありまして、そういった意味では、日本において、念仏の種をまいておいてくださったお方は、聖徳太子であるといっても過言ではないと思うのであります。

●宮中での無量寿経講義

聖徳太子が亡くなられたあと、浄土念仏の信仰はどうなったかといいますと、推古天皇（聖徳太子が補佐した天皇）のあとを継がれた舒明天皇は、即位十二年目（六四〇）に、入唐僧惠隠（えおん）を宮中に招いて、『無量寿経』を講義させたのであります（『日本書記』）。惠隠師は推古天皇の代に小野妹子に随って隋に渡った学僧でありまして、三十一年の長きにわたり隋・唐の文物をおさめて帰朝された方



です。帰朝の翌年、舒明天皇の命で『無量寿経』を宮中で講義したわけですが、このとき聴衆一千人に達したと『日本書記』は伝えています。

宮中でお経を講ずるのを宮講（きやうかう）といいます。が、和語では「みかどよみ」と訓ぜられておりました。宮講がいつから始まったかといえますと、推古天皇の十一年（六〇三）に、聖徳太子が諸法師に安宅経を講じさせたと『日本書記』にあります。しかしこれは宮殿の安泰を祈るための儀式だったようで、真の意味での宮講とはいえず、この惠隠法師の『無量寿経』講義こそが宮講の最初だったのです。ために『元亨釈書』には、「宮講の始めなればなり」としてこれを記述しております。

日本の宮中で、真つ先に浄土経典（無量寿経）が講ぜられたということは、私たち念仏信者にとって、看過できない重大事件であるといふべきでありましょう。

ご承知のように『無量寿経』は、阿弥陀仏

の本願を説いた浄土教の根本聖典であります。天皇様に對して、まず第一にこの経が講ぜられたということは、念仏信仰こそ人間生活に大切であると理解された左証とみてよいのではないのでしょうか。聖德太子は、人間みんなが凡夫であると喝破された、それではその凡夫が救われる教えは何かといえ、まず第一に浄土教なのでありますから、そのことが、日本に仏教が流入して間もなくの頃から理解されていた、そうみてみて、決して我田引水にはならないと思うのであります。そのご様々の経が宮中で講ぜられました、孝德天皇の白雉三年（六五二）に、惠隱師は内裏で再び『無量寿經』を講義しているものであります。日本における浄土教の発動といつてよいであります。

●念仏信仰の萌芽

いよいよ日本に浄土念仏の信仰が動き出したとすれば、その証拠がもつともつと出てこ



なければなりません。それもちゃんとあるのであります、持統天皇の三年（六八九）には新羅から金銅の弥陀三尊像が献じられ、同六年には新羅から僧が九州に来て、阿弥陀佛像を伝えた、などということが『日本書記』に記されているのであります。この頃、光明皇后の母親（橘夫人三千代）聖德太子の橘妃とは別人が、金銅弥陀三尊を造献して、豪華な厨子と共に橘夫人念持仏と称されて法隆寺に現存していることは（国宝）、学校の教科書にも出ております。念持仏とは、つねに自分の居間などに安置し礼拝供養する仏様のことです。また知恩院にもこの代の押出弥陀三尊像がございます。押出というのは、半肉彫りの鑄造原形に薄い銅板をのせ、叩いて浮き出させた美術工芸品であります。

こういつたことから、念仏信仰、阿弥陀浄土信仰の萌芽を知ることができるわけであり

（つづく）

阪神・淡路大震災から一週間後の被災地へ行った。浄土宗寺院の被害などを調べて廻ったのだが、交通渋滞が激しいことから自転車での取材となった。

自転車のペダルを踏みながら、はじめはその破壊力のすごさに圧倒された。地震直後から何度もテレビや新聞で見た風景だが、実際、目の前にして見たものは、その力の強烈さを充分に感じさせるものだった。『こんな地震が関東に起きたらどうなるんだろうか』、そしてわが家のことを思った。

倒れた高速道路や、主要道路にかかる倒壊したビルや家の片付けは始まっていたが、一步裏通りに入ると、倒れた家々がそのままの状態で道をふさぎ、行

く手を何度もさえぎられての進行となった。

そんな中で目がだんだん慣れてきたのか、破壊された建物ばかりを見ていた目が、そこにいる人々へと移っていった。瓦礫の山と化したわが家から少しでも必要なものを取り出そうと、片付けをする人々。大変だなあ、これからこの人たちはどうするんだろう、とても人ごととは思えなくなってくる。

そんなことを思いながら走っているうちに、ひとつのことが気になりはじめた。崩れた家の片付けをしている女性たちが、みんな美しく見えるのだ。あり合わせの衣服に身を包み、お風呂にも入れないのだろう、埃でよごれた髪や顔で一心に木片な

美しかった女性たち

どを引き抜いている。周りなど気にもかけていない様子だ。平素、美しく着飾り、きれいにお化粧した姿を見慣れているものにとつて、それはあまりにもかけ離れた姿であったが、彼女らのその姿は、衣服やお化粧などとは比べようもない、内から沸きだす美しさだった。特に若い女性が瓦礫の山の上で、フツと一息入れて天を仰ぐ姿など神聖というか崇高というか、光輝いているようにさえ見えた。

人間の真の美しさは外面ではない、ということとは分かっているが、ついその外面にだまされてしまう日常の中で、今回見た女性たちの姿はまさに真の美しさであった。

(一)

韓国の花まつり

— 編集部 —

日本では四月八日を花まつり、お釈迦様がお生まれになった日として、毎年各寺院、寺の幼稚園などで花御堂を飾り、その中に右手で天を、左手で地を指している、かわいらしいお釈迦様のお姿を安置して、甘茶をかけ、そのご降誕をお祝いしている。

しかしその様子は、どんな大本山で行われていても、決して新聞に載ることも、ましてやテレビで放映されることもない。

ところがお隣の国韓国では、まったく違う状況を目にするのである。

韓国での降誕会（花まつり）は、プチョニム・オーシン・ナルと言いい、その直訳は、お釈迦様がおみえになった日、降りてこられた日という。決して誕生などとは言わないのである。日本人である我々が、釈尊の誕生などと言うと、韓国の仏教徒からひどく怒られてしまった。釈尊を我々と同じ人間などと考えたことはもってのほかなのである。我々も「降誕会」という言

葉をもう一度深く考えなければならぬだろう。

さて韓国では、降誕会は毎年陰暦の四月八日に行われる。そしてその日は国民の休日である。それは韓国が元々仏教国であったものの、近世にキリスト教が隆盛となり、人口の二五%が信徒となった。特に季承晩大統領が熱心なクリスチャンで、十二月二十五日が国民の祝日になったことから、人口の四〇%を占める仏教徒が大運動を起こし、一九七五年に陰暦四月八日が祝日となったのである。毎年太陽暦上では日にちが変わってしまう祝日、日本では考えられないことだ。

この陰暦四月八日が近づく韓国の中、寺の参道はもとより、商店街のアーケードとい、地下道の中まで、ちようど日本のお祭りの祭礼のちようちんのように、プチョニム・オーシン・ナルと書かれたちようちんが町中に張りめぐらされるのである。また行事が行われる会場、寺院の境内や広場などは、その頭上に所狭しと、



びつしりと縄が張りめぐらされて、そこにおびただしい数のちようちんがぶら下がるのである。その光景はまさに圧巻である。

この境内に張りめぐらされたちようちんは、すべて信徒の寄進によるものだ。寄進の額にあわせてちようちんも大きさまである。一番の場所には、大統領や党の総裁など第一級の政治

家の名前のちようちんが並んでいる。ちようちんをあげることが、信望を得るひとつなのである。与党、野党の区別なく皆あげているようだ。

我々も記念にちようちんをあげることにしたが、その寄進額の高さに驚いた。韓国の物価から考えると大変な額のように思える。韓国の僧侶の話では、一年の大半の収入を、この降誕会で得てしまうそう。なるほどうなずけた。

テレビでも、前々日ぐらいから、花咲く鹿野苑、仏教伝来のシルクロードや、修行僧の内面の葛藤をモデルにしたドラマ、音楽や童話で児童教化に励む老僧などを映し出し、人々はその日待ちこがれるのである。

陰暦四月八日の当日、観光寺院ですべての拝観料は無料になる。朝からお年寄りから若者、子供まで、あらゆる世代の人々が正装の姿をし、中でもお年寄りは、チマ・チヨゴリの正装の姿でお寺参りをする。その人々の列は絶えない。

特に驚いたのは、若者どうし、子供どうしてお参りをする姿である。特別強制があるわけではないのに、皆樂しげにお参りをしていた。広場では在家の仏教青年会の若者が、仏教讃歌をギターでフォーク調に歌っている姿が、実にすがすがしかった。

また堂宇の中ではお斉のふるまいがある。食事は宗教儀礼のひとつとして重要な意味を締めるが、ここでも誰でもがこのお斉を受けることができる。

そしていよいよ夕方、日も暮れてくると、そのすべてのちようちんに日が灯される。そのちようちんの数からして、明るさは大変なものである。堂宇の中では読経が始まる。そして境内は信徒で肩がぶつかりあい、身動きもとれぬほどぎっしりと埋め尽くされてしまった。私が訪れた慶州の仏国寺も、何万という信徒でいっぱいである。まさに元旦のカウントダウンを待つ増上寺であり、明治神宮を思い出される。

その信徒全員に、紙コップにろうそくを刺したものが配られる。なるほどこれならば蠟ろうもたれないし、歩いても炎が消えにくいのだろう。

そしてこれがこの行事のクライマックス、タツトリ（塔回り）の持ち物だ。

堂宇の中のお経が終わると、ご本尊からいただいた火が、外の先頭の人ひとのろうそくに移された。そしてその人から後ろの人へと、炎はどんどん移されてゆき、その炎が移ることによって、いつしか列が出来上がり、火が灯された人からゆつくりと歩き出し、いよいよ塔回りが始まっ



たのである。鳥かんすればきつと、炎がへびのようになつて、さぞやさしいことだろう。まさに炎に包まれたお浄土そのものだ。この塔回りは、自分の歳の数だけ塔の回りを回るという説もあるようだが、この仏国寺は全員が大きくお堂の回りを回っているようで、歳の数は関係なさそうだ。

一時間も歩いたであろうか、一通り塔回りが落ち着くと寺の住職の法話が始まった。そしてそれが終わるとみんな楽しげに、満足しきった顔で帰って行つた。まさに日本の初詣を思い出

させる光景であった。

この花まつりは、韓国のすべての寺院、さまざまな広場、会場で行われている。そして翌日のテレビ、新聞は、各地の花まつりを伝えるニュースが必ず載っているのである。

日本ではどうであらうか、日本では宗祖の記念日ばかりが尊重され、釈尊の記念日が影をひそめているように感じられる。しかし日本も昔は違っていたようだ。

江戸時代の書物などによれば、日本でも芝の増上寺や浅草の浅草寺、大阪の四天王寺などは、この花まつりの行事で名を馳せたことが記されている。花まつりが庶民と寺を結びつける恰好の行事だったのである。それもそのはずで、この時代は民間催事である「卯月八日」のお祭りと合体したことが、降誕会を隆盛にした一因である。

田植えを行うにあたり、山から山の神を田に迎えて田を守ってもらおうという、農耕民族の

祈りである「卯月八日」のお祭りと、お釈迦様の降誕という、天から仏がこの地上に下りてきたことを祝うお祭りが、人々の意識の中でひとつになって、花まつりが盛んになっていったことが伺える。つまり四月八日は、当然陰暦の四月八日、今という五月の半ば過ぎでなければならなかったのである。

暦が太陽暦に変わったとき、日本ではほとんどの行事がそのまま太陽暦の日になってしまい、その複合的意味がはずされたとき、その隆盛も終わった感がある。

韓国と同様にとまではゆかないまでも、「あなたの家の宗教は」の問いに、国民の六五%までが仏教と答えるこの国で、せめてお釈迦様の降誕会（花まつり）ぐらいは、社会的認知を受けたいと思うのである。

韓国の花まつりに参加して、そんなことを考えてしまった。

（文責・長谷川岱潤）

阪神淡路大震災被災地レポート

当会の会員で兵庫県にある寺院は28か寺ありますが、今回の大震災の被害のひどかった地区に約10か寺が点在しています。今回編集スタッフが現地に出かけ、この中の数か寺を回りましたのでその様子をお伝えいたします。

JRと各私鉄を、何度も乗り継がなくてはならないほど寸断された線路、大阪から西へ向かうJRは住吉駅までで線路が断たれていました。この住吉駅のすぐ西の線路わきに阿弥陀寺さんがあります。「庫裡全壊、本堂無事」が事前情報でしたが、コンクリート造りの本堂をのぞき、庫裡、山門、壁などは完全に崩壊してしまいました。ですが、残った本堂を避難所にし、炊き出しや非常用トイレを隣接させ、地元の被災者に開放されていました。近辺の倒壊家屋跡の「連絡先 阿弥陀寺本堂」の看板が、とても印象的でした。「本堂、庫裡全壊」という大きな被害にあったのが、東灘区の中勝寺さんです。県道に面した入り口わきの鐘楼、本堂、書院、庫裡、あらゆるものが倒壊してしまいました。私たちが着いた時には撤去作業中で、住職と婦人がその作業を見守っているところでした。本葺き、本瓦の本堂が墓のほうに倒れてしまったとのこと。墓石もほとんどが倒れ、棟続きの書院、そして庫裡と敷地内の建物が一瞬にして崩れたとのこと。「一日も早い復旧のために乗り出したばかり

だが、廃材、がれきの量は一般家屋の数倍ある」という住職。被害を目の前にし、かける言葉も見つからない私たちに、「浄土」面白くなつたねと、逆に励まされてしまいました。

この二か寺を訪れたあと、二駅電車に乗り、一駅歩き、また一駅電車に乗り、一駅歩き、また電車と、本堂に寸断された交通網を利用し長田区へ。火災で焼け野原と化した地区から、神戸南無の会の活動する蓮池小学校の避難所へ、そして光堂寺へ。瓦が落ち、塀が崩れたしたもの、建物の倒壊は免れていました。門前の掲示板のこの一文に、住職の想いが込められていました。「自然の力がいかに大きいものかをよく知りました。しかしその自然は必ず春の日を届けてくれるはずですよ」大地震から一カ月、通勤の人々が全壊した家屋の前を急ぎ足で歩き、すぐ脇の避難所では職と家を失った人々が炊き出しの列を作る。外見では被害のないマンションの隣に全壊した家屋が立ち並ぶ。被災地神戸の復興は貧富の差をより拡大し、弱者をより弱い立場に追い込むことは間違いないさようです。前号の平尾弘衆さんのルポにもありましたが、僧侶だからできること、すべきことを今からでも考えなければならぬようです。復興にはとても長い時間がかかるのですから。（2月23日の現地取材にて）

避難先を知らせる看板が立つ。



中勝寺では鐘楼が倒れ入り口をふさいでしまった。

仏教最前線緊急報告

阪神大震災 レポート



1月17日未明に発生した兵庫県南部を震源とする地震は、死者五千名を超える大震災となった。

アーユス（＝仏教国際協力ネットワーク茂田真澄理事長）では神戸緊急連絡事務所を神戸市中央区東極楽寺に設置し活動を開始した。現地の状況が、日々刻々と変化する中で、アーユスは様々な活動を展開した。

以下、そのレポートをまとめて報告する。

―現地活動内容―

1 読経・回向ボランティア

〈経緯〉

被災後、遺体安置所または非難所に相当数の遺体が置かれ、その供養ができないままとなっていた。そこで、僧侶がその供養をしようということで宗派を越えて参集した。しかし、実際に動き始めた時、ほとんどの遺体は安置所等ではなく、火葬場での供養することになった。

〈実施期間〉 1月25日(水)～31日(火) 7日間

〈場所〉 神戸市北区山田町下谷上字中一里山14

神戸市立鶴越(ひよどりこえ) 斎場

〈内容〉

ボランティア僧侶が斎場で待機。遺体が茶毘に付された後、遺族の要望に応じて読経・回向をし、供養する。

〈ボランティア僧の宗派〉 五十音順

黄檗宗／時宗／浄土宗／浄土宗西山禅林寺派／浄土真宗本願寺派／真言宗高野山派／真言宗単立／

真言宗智山派／真言宗豊山派／真言宗大谷派／西山浄土宗／曹洞宗／天台宗／日蓮宗／本門法華宗／臨済宗

2 個別ボランティア

(1) 避難所でのボランティア

○二宮小学校

1月27日・28日 各1名

○宮本小学校

1月27日 1名

○阿弥陀寺での瓦とりはずし作業

1月30日・31日 4～5名にて

(2) 洗濯ボランティア

ニース調査

(3) 炊き出し

長田区の駒ヶ林公園。1月31日・2月1日

3 お話ボランティア

1月30日から実施中。またボランティア募集中

4 ホームステイ受入れ

現在、募集中

5 その他

読経・回向ボランティア 鴨越（ひよどり）齋場

神戸市立鴨越斎場では、茶毘にふされた被災者の供養が行われた。この
廻向ボランティアに参加したメンバー
からのレポート（25日～27日分）を
紹介する。緊張感と深い哀しみを覚
えることが出来るだろう。

●中島大成（東京都・日蓮宗）レポート

1月25日昼に茂田理事長や中島が、鴨越斎場到着。先に朝8時頃より真言宗の読経チーム5名と永平寺（曹洞宗）の読経チーム3名が来ていて、読経回向をなさっていた。高野山チームは他に3名ほどが神戸市内にて活動。このチームは青年会組織のボランティア有志僧とのこと。また永平寺チームは永平寺の公式の命により、特派された方々である。当初は、どの宗派の方も高野山、永平寺チームが合同で回向されたものの、我々が到着の後は、各宗派別の回向とした。ただしその際には他の僧も全員合掌し、参加をした。また、浄土宗坂下師も堺からバイクで来てくださった。

遺族の方々からは「とても有り難い」と感謝された。終了時刻は午後7時10分。火葬場の方々に

より、暖房機や食事、夜間の照明のランタンなどを次々提供される。ランタンは個人のものを家から届けてもらったものだった。

とにかく寒くて、忍耐を要求される仕事である。犠牲者の遺族の方々は、とても言葉にできないくらいの悲しみを持っておられる。

1月26日午前7時30分、アールス緊急連絡事務所にテレビ大阪の取材クルーが到着。出発の風景と東極楽寺住職の小林上人へのインタビュー、鶴越斎場の回向風景を取材。この映像はテレビ東京系列で同日午後6時よりニュースで放送された。本日は曹洞宗は新たに5名の雲水を永平寺から送り込み、7名のチームとなる。高野山チームは3名が長田区へ出かけ、3〜4名で回向にあたる。さらに、真言宗の二年配の上人が三田市から駆けつけて大勢となる。また真宗の方からも被災された長田区の高坂師と、別の地区の被災寺院より中村師がラジオや新聞を見て、駆けつけた。これで、天台以外のほとんどがカバーできる体制となった。最も希望が多かった宗派は浄土真宗で、被災地寺院として駆けつけた高坂師、中村師、これに浄

土宗の正本師と坂下師が加わり、次から次の連続の活躍であった。曹洞宗の方々は、もっぱら他宗のバックアップにまわってくださった。特に日蓮宗の私は一人であるため、私の読経の時に曹洞宗の方々が寿量品第十六偈を一緒に誦んでくださり、とても助かった。現場では宗派は関係なく、念仏を唱え、題目を唱える。こんな感激は初めてのものだ。私にとつても、とても良い勉強となる。宗教は、本来はこうでなくてはいけないのではない。平常時には、心の「我」がそれを妨げる。こんな非常時の方が、人間は逆に人間らしくなり、宗教が宗教らしくなるのは何か悲しい気がする。平常時にお互い拝みあえれば、戦争にはならないし、そこに本当の仏教の姿があるような気がする。これをこれから追求しよう!!

本日はとても悲しく涙が止まらなかった。8歳の女の子と6歳の男の子の兄弟の回向があった。私の担当ではなかったが、可愛いさかりだったろうに、地震がなければ、今日も元気に仲良く遊びまわっていただろうに……と考えると、子どもを持つ親としては悲しくて悲しくて、涙、涙……でした。

浄土渴望

1994秋 自死を選んだ友へ

匿名希望・蓮門小子（東京都）

西方へ届けと祈る御名ありひとりの涙ひとすじの声

彼の仏の願にはあれどいま騒ぐこころ血を吐くごとき称名

凍てついて苦悩のままに見上げつつ呼べば見えくるいのちのはじめ

J・FORUM（浄土フォーラム）は読者の皆さまのために開かれたページです。

短歌、俳句、書評、映評、劇評、TVウォッチング、あるいは身边におきた面白いこと、気づかれたことなどのエッセイ等、編集部にお寄せください。

合掌の形にあれば受け取れぬ友の形見も遺書も写真も

青年、滅びんとして自死さえも赦さず赦す念仏一会

その顔が浮かび消え行く通夜にして滞り無く終わる哀しさ

なぜ急ぐと問いたいけれどいまはただ彌陀に抱かれて眠るみどりご

春

誌 上 投 句

守られて生命輝く春の朝

児玉良男（静岡県）

せり摘んで匂の香りを鉢に盛る



輪廻とはと開きし辞書に春の雪

四方 遵（奈良県）

迷い箸森羅万象春めきぬ

花守を兼ねて手焼きの煎餅屋

鍼力屋に波うつてゐる春の虹

+

春爛漫天にも地にも我ひとり

煮えて噴きこぼれるいのち芹なすな

+

いま確か巡査のスキップ大ふぐり

墓守のこうべを廻る虹二匹

+

向こうより誰が見つめる桃の花

生きてこの花の天蓋いただけり

小間井俊子（石川県）

行方美枝子（北海道）

谷中耕造（東京都）

児玉仁良（埼玉県）

極・楽・浄・土

生も死も悦べる世界

須藤隆仙 著



北山圖

『極楽浄土 生も死も悦べる世界』

須藤隆仙著

須藤隆仙氏と言えば、本誌では古くからお馴染みであり、一昨年の七月号からは「念仏信仰の系譜を長きに亘って連載して頂いておりますので、本誌の読者である皆さんはすぐにお気づきでしょう。

昨秋刊行された氏の『極楽浄土

―生も死も悦べる世界―は、以前（平成三年十月号より九回）本誌で連載されたものをまとめられたもので、法然上人「一紙小消息」

の「受け難き人身を受け、逢い難き本願に逢いて、起し難き道心を起こして、離れ難き輪廻の里を離れて、生まれ難き浄土に往生せんこと悦びの中の悦びなり。」の文がよりどころとされています。

ご承知の通り、この文は「一枚起請文」と並んで大変身近なものです。私たちがその意味することろ、元祖上人の意図していることを汲みとることが出来ないような気も致します。『極楽浄土』では本願、輪廻、浄土、往生などについてのやさしい解説がほどこされ、そして、人として大切なものは何か、人はどう生きていくのが本当なのかといったことが説かれ

ており、元祖上人の御心が伝わってくるようです。

氏がこの書の中で強調されているのは、この世に人間として生を受けたありがたさをもっと強く受けとめ、人は決してひとりでは生きていけないのであるから周りの人々を救う力となることを目的として生きるのが真の人生であり、とりもなおさずそれはお念仏、そして如来の本願力によってこそ実現されるものである、ということにあるといえます。『極楽は私の帰るべきふるさと』、大自然、大宇宙がまさにそうなのである」という氏の言葉は、昨今クローズアップされている環境問題を考えるに当たっても、避けることの出来ない重要なキーワードとなりそうです。

心のホームレス”になりがち

『仏教コミックス』

ひろさちや原作

現代の私たちの心に、あたかなぬくもりと潤いを与えてくれる好書です。是非とも、「一読をお勧め致します」。(北辰堂・一二七ページ・税込一〇三〇円)

「どうしたら仏様の教えを、仏教の歴史をわかりやすく伝えることが、学ぶことができるだろう？」そう思われたことのある人は決して少なくはないでしょう。そして「絵をまじえてそれができないものだろうか。」とお考えになりました方も多くいらっしゃると思います。

ここに紹介する『仏教コミックス』全一〇八巻は、宗教評論家

ひろさちや先生の原作が人気漫画家数名によって劇画化されたもので、まさにそういった理想が現実のものとなった、画期的な「まんが本」と言えます。お釈迦様の生涯や種々の経典の内容、各祖師方のみ教え等々…。本や言葉からだけではなかなかわかりにくかったことが、イメージをより鮮明なものにしつつ自然に理解できるよう配慮されています。現在までに二四回、七〇冊が配本されていますが、そのうち私たちにとって特に興味深いのは『阿弥陀仏の願い』(三〇巻)、『お浄土のお経 観無量寿経』(四一巻)、『お浄土のはなし』(四六巻) などでしょう。

他にも、例えば『七福神物語』(二五巻)、『まんが仏教人生相談』(九六巻)、『戒名のはなし』(九八巻)、『お墓のはなし』(一〇一巻)

など、仏教以外のことや私たちのすぐ目の前にある実際的な問題を題材にしたものも豊富です。

全一〇八巻が煩惱の数と同じというのもおもしろいですね。これを全巻読めば煩惱をなくすことが出来る(?) かもしれません。子供から大人まで、そして能家はもとより在家の方にも親しまれる仏教の入門書と言えるでしょう。

(すずき出版・各巻一五三ページ・二二〇円)

『仏教の質問箱 3』



編集



後記

●今月号からグラビアページを「忘れられた寺院」と題し、今年一月に撮った、カンボジアのアンコールワット、アンコールトムの写真で飾って頂くことになった。

私事で恐縮だが私も六年前、カンボジアと平和がまだ実現されていないときに行ったことがある。その時は夜には銃撃戦が行われ、その地に泊まることなどできなかったが、今では宿泊もでき日本人観光客が毎日のように訪れているとのこと、平和を感じさせられ嬉しくもなるが、真の平和にはまだまだ遠いようである。カンボジアの人々の祈りを写真から感じ取って頂きたい。

●阪神大震災の復興にはまだまだ時間がかるよう、被災された方々の将来への不安が解消される日は遠い。ボランティア側の疲れ、問題も露出してきているようだ。ボランティアをする側も受ける側も共に楽しくなるようなもの、まさに三輪清浄の布施の心がなければ長期化は難しい。

編集チーフ
編集スタッフ

編集協力

長谷川岱潤
齋藤晃道
栗田順一
村田洋一
太田正孝
石上俊敬
オフィス代表 佐山哲郎

●会費ご請求のお知らせと訂正
平成七年度の会費につきましては、後日事務局より会員各位に別途ご請求させて頂きますので、同封の振込み用紙にてご送金下さいますようお願い致します。

また、三月号七〇頁のFAX番号に間違いがございました。正しい番号は〇三(三五七八)七〇三六です。お詫び、訂正致します。

浄土

六十一巻 四月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成七年三月二十五日
発行 平成七年四月一日

編集人 宮林昭彦
発行人 牧田諦亮
印刷所 株式会社 平文社
写真植字 株式会社 シーティーイー
〒一〇五 東京都港区芝公園四七四明照会館内
発行所 法然上人鑽仰会
電話 〇三(三五七八)六九四七
FAX 〇三(三五七八)七〇三六



ノドうつ うまさ。 黒ラベル

ただいま、渴いています。ビールを欲しがっています。

ノドが体が、さで、黒ラベル。プシュッ！ゴクゴクゴクゴク…。

「あーッ生きてよかったーッ」と、声が出る。

このうまさは、何なんだ。ノドたく快感、
駆けぬける爽やかな味わい。1秒1秒が、
たまらない喜びに満ちている。

この黒ラベルの味、ひとことというところ？
「ノドうつ、うまさ」それが黒ラベルです。

ビールは、20歳になってからあきかんはリサイクルへ

●「塩分の高い自動販売機による過剰の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。」



新デザイン缶

サッポロ(生)黒ラベル

サッポロビール株式会社



LIFE TOGETHER



人間のやさしさをクルマに。

スピードおさえて、いい運転。シートベルトをしめましょう。

姿と、かたち。



これが、新しいセドリック

高級車を測る最大の基準は、その姿とかたちである。
つくりの強い姿が感じられる姿と、それを忠実に具現化した正統のフォルム。すなわち、かたちである。
まず、姿がいい。かたちがいい。新しいセドリックを見てほしい。

Cedric

日産のかたちを見てください。PHOTO: セドリックV30ツインカムターボ プロアム
主な装備 ●VG30DET(V6ツインカムターボ・総排気量2960cc)エンジン ●最高出力255PS/6000rpm(※NET値) ●最大トルク35.0kgm/
3200rpm ●フルレンジ電子制御4速オートマチック(E-AT)(※NET値)とは、エンジンと車間に搭載した状態とほぼ同等条件で測定したも
のです。日産自動車株式会社お客様相談室 ●全国共通フリーダイヤル0120-315-232 お近くのローレル販売会社へ。